

# 言語・思考と人間形成

——ジョージ・ケリーの仮説言語観——

藤原 哲

あると言えよう。

ところで、**独断論**(**教条主義**)を打破する創造性に関して、言語はいかなる役割を果しているであろうか。あるいは障害になつているのであろうか。この点について、ジョージ・ケリーの論文「**仮説の言語——人間の心理学的的方法——**」(**The Language of Hypotheses: Man's Psychological Instrument**)を中心として、その思想と**仮説言語観**を考察する。

## 二

優れた科学者や小説家は、明らかなことを乗り越え、新しい世界を創造する。すなわち、新しい枠組を發明考察し、**内的・外的事象**に対して、新しい光を投げかけ、よりよい意味を付与するのである。それに対して、**精神障害者**は、実在とは無関係な主観的世界に内閉し、**内的・外的世界**を把握する枠組が妥当なものでなければ、修正すべきであるにもかかわらず、その枠組をかたく固執しようとする。しかもこの傾向は、**程度の差こそあれ、正常者**と言われている人にも認められる。この観点からすれば、人間の教育あるいは**精神の発達**は、**外的圧力**に有無を言わず屈服させること、あるいは**独断的世界**を、**事実**を集積することによって**強化補強**することではなく、**古い事態**に、**新しい意味**を付与することを可能にさせる枠組を、**内省**を通して、**創造**することにあると言えよう。一般的に、人間の発達は、**自己の抱く独断論**に安住し、**事象**に対して、**一面の接近**を無意味に繰り返すことではなく、よりよい**妥当な枠組**を日々新たに**創造**し、**事象(実在)**に対して**前進的に肉迫**することに

一九〇五年、**牧師**の家庭に生まれた**ケリー**は、**学生時代**、**物理学**と**数学**を専攻し、**大学院**では**教育社会学**を、後に**心理学**を専攻し、一九三一年、**アイオワ州立大学**で**哲学博士**の学位を授与され、同年**花嫁**を携え、**大恐慌**のさなか、**生理学的心理学**に抱負を抱いて、**カansas州立大学**に赴任した。しかし、**世界的大恐慌**による**精神的犠牲者**に、**又多くの精神的に荒廃した学生**や**若者に直面**した**ケリー**は、**学校教育**特に**心理学の無力さ**を反省し、**人間が自己自身の運命**の**著者**であることを標榜する**人道主義的心理学**を開拓すべく全く独

自な道に旅立つことになる。

科学的決定論を模範とした刺激反応心理学が主流をなす心理学界ならびに日常生活における宿命論的思考に挑戦したケリイは、オハイオ州立大学在職中の一九五五年、人間は状況に必ずしも拘束されないこと、世界に対する現在の解釈は、修正と変更を受けること、世界を処理する枠組には、現在のものよりも、もっとよい枠組が常に存在するという主旨の「非唯一絶対解釈主義」(constructive alternativism)の哲学的立場に立脚し、人生の心理学的再構成を目的とした「個人的構成概念の心理学」(The Psychology of Personal Constructs)と題する二巻の大著を公刊し、世界の心理学者としての地位を不動のものとする。

しかしながら残念なことに、フロイトと並んで、独創的心理学者としての評価を受けながらも、ケリイの思想・理論は、その内容が高度に抽象的であつ難解なために、欧米特に我が国でも、方法論を除いて、思想と理論が世に紹介すらされていない現状である。しかし、ケリイは言語の問題に関してさえ、我々に反省を促す視点を訴えているのである。言語に内在する独断論を警鐘し、仮説言語使用の重要性を訴えているのである。

### 三

言語の使用法に関して、ケリイは前述した論文の中で、言語の仮説的使用法に対して、客観的使用法と現象学的使用法を対置し、前者が人間を進歩させる心理学的の方法であることを提起する。初めに、言語の客観的使用法について考察する。

「西洋的思考は、言語が、事物に依存するという実用的見解を採用

する。すなわち、事物がことは決定するのである。この考えは、事物がことばに依存するとする、いわゆる魔術的思考を改良したものである」(3)ここで魔術的思考とは、ことばを唱えれば、ことばの対応物である事物が現れることを期待するものであり、客観的思考とは、事物を精査すれば、ことばが出てくるとする考え方である。

客観的思考の背景を、ケリイはジョン・ロックの主張に求め、次のように述べている。「過去三世紀間、アングロ・サクソン人は、知識が感覚を通して生じるという間違つた前提の下に思考を進めてきた。これは、一六九〇年におけるジョン・ロックの偉大なる思想ではあつた。ロックは、この思想を提唱することによって、現代実験心理学とフロイトの勇氣ある経験主義(引用者注、フロイトは、十九世紀以来の伝統の下に、科学的努力を、心の中に隠されたものを発見する努力とみなした)のための重要な基礎を提供した」(4)

確かに、人間は、ことばと事物との関係に関して、魔術的思考から客観的思考に移行することによって、科学を進歩させてきた。しかしその反面、我々は、ことばをどのように考え、どのように使用するようになったであろうか。ことばに関する一つの考え方は、ことばが、事物の代理物だとするものであろう。事実パウロフも、ことばを第二信号系として定義してしまつた。そこで我々は、意識するとしなむにかかわらず、ケリイのいう言語の客観的使用法の枠内にとどまってしまうかのようである。なおケリイは、言語の客観的使用法については、簡単に次のように述べている。

「私が人床は硬い。√と言うならば、主語・述語(引用者注、ここでは主部と主語を厳密に区別しないで表記することにした。)の関係が、主語それ自身に内在している言語体系を私は採用する。硬い

のは床であり、誰がそういったかということとは無関係に、硬いことは床の性質である。ある話者がそれを言ったからではなく、たまたま床が硬いから、この文は成り立つ。この文の妥当性は、話者からではなく、床から生じる。<sup>(7)</sup>ここで、「主語・述語の関係が、主語それ自身に内在」するとは、主語である「床」という事象から、述語である「硬い」ということばが導かれること、又、「この文の妥当性……」とは、A床は硬いVという文の正誤が、床の性質に依存することを意味する。したがって、ケリーの主張する言語の客観的使用法とは、ある命題が呈示されたばあい、主語から述語を導こうとする心理的反応だと言えよう。

この客観的思考を通して、我々は真理に近づくと考えやすい。ところがケリーは、過去二千年以上に亘って無批判的に受け入れられてきたこの西欧的思考には、半面の真理があって、世界に関する人間の認識を高めてきたが、半面では、「客観性を装ってしばしば提示される主語・述語言語構造の独断論」<sup>(8)</sup>があることを指摘する。客観的言語使用に関するケリーの批判論は次の通りである。

「もし私が、私は内向的であると私について述べるならば、私は、私自身の主語・述語の眞にかかってしまう。内的自己（私の自己）でさえ、実際に内向家であるという義務、あるいは私に張り付けた内向家ということから逃れる道を見いださなければならないという重荷を課せられることになる。換言すれば、（中略）今後は、私は、私に与えた内向家ということを気遣いじみて処理しようとするようになる。それに加えて、私の家族や友人も、しばしば喜んで、この闘争に参加してくるのである」<sup>(9)</sup>又、「私が、リンゼイ教授の左の靴は内向的であると言うと、内向的ということに対しては靴に責任が

あるかのように、人々は教授の靴を見る。あるいは、キャッチル教授の頭は散漫だと言えば、この主張が彼の頭から出てきたものであるかのように、人々は彼を見上げる」<sup>(10)</sup>とケリーは述べている。

ここで、「主語・述語の眞」とは、主語から述語が導かれるとする独断論であり、加えて、主語を中心にして、主語を精査することによって、呈示された述語の正否を検討し、主語が述語に等しいこと、あるいは等しくないことが客観的に実証されれば（主語の属性として、述語の正否を支持する事実があれば）この事実が、主語に関する真実だとみなす独断論も示唆すると言えよう。又この独断論は、主語に関する真理を把握したと考えるので、主語に関して、人を盲目にさせ、新しい認識が深まることを妨害することだけに役立つことになろう。さらに、「主語・述語言語構造の独断論」は、述語の正否を、主語によって客観的にチェックできない、いかなる命題も無意味だとする論理実証主義<sup>(11)</sup>あるいは、事実を集積することによって真理を把握したとする断片的事実集積主義<sup>(12)</sup>などを内包するものと解釈されよう。

我々は確かに、事象からことばが導かれると無意識的にも思っている。AはBである。Vという文に接すると、それを肯定するか、否定するか、二つの選択肢のいずれかを裏づける事実が見いだされるならば、それをもって、主語に関する真理を把握したという錯覚に落ちいりやすい。しかしケリーは、言語の客観的使用が万能ではなく、現象学的使用を認識することが重要だといっているのである。

#### 四

次に言語の現象学的使用法について考察する。現象学的使用法と

仮説的使用法の差異は決定的に重要であるが、初めに、両者と客観的使用法との区別を主張するケリーの思想的背景についてふれておきたい。

先に、 $\wedge A$ は $B$ だ。 $\vee$ という文において、 $A$ に関する事実から、 $B$ という述語（結論）が導かれることを見てきた。これが客観的思考でもあった。我々は、日常生活においても、ある結論に達した（たとえば自殺以外に私の進むべき道はないという結論に達した）ばあい、この結論に達したのは、いろいろな事実（たとえば失恋など）から必然的に絶対的なたちで導かれたからであると思いやすい。結論を導いた責任は事実にあると錯覚しやすい。これは、刺激・事実・主語と反応・結論（意味）・述語との因果律を承認する自然主義的人間観である。しかしケリーは、人間における自由を単に強調するだけの、いわゆる実在主義者ではないけれども、事実と結論との関係、特に結論を導いた責任の所在に関しては、次のように主張するのである。

結論を導いた「責任はどこにあるのであろうか。予測した通りの事実が生じたとしても（引用者注、仮説が実証されたとしても）、その事実、結論の責任をとらせることができるだろうか。私はそうではないと思う。世界が何であろうと、人間は、個人が見る世界に、その人固有の解釈を置くことによってのみ、世界を把握することができるのである。世界に意味を与える適切な枠組を考察する上で、個人の才能に限界があるけれども、それ故、多くの不幸が過ぎ去ることになるけれども、究極の未来に対する鍵を握っているのは、事実ではなく、その人自身である。結論に対して責任があるのは、その人自身であり、自己の下した結論が、自分以外の何かによ

って命令されたと人が主張することは全く不適當である」<sup>13</sup>。たとえば、同じ事実であっても、価値観（枠組）が異なれば、全く相反する意味（結論）が与えられることもある。したがって、 $\wedge A$ は $B$ だ。 $\vee$ という文において、 $B$ という述語を導いたのは、 $A$ という事象そのものではなく、文の表現者の枠組だということになる。この種のことは使用法を、ケリーは現象学的使用法と呼んだのである。この点について彼は次のように述べている。

$\wedge A$ 床は硬い。 $\vee$ のような「文は、話し手の心の状態を表わしているものであって、その文は、心の状態以上の何かを表すものでは必ずしもない。（中略）現象学は、少なくとも、心理学者の思考に人り始めた。そしてこの種の意味は、二、三十年前よりも、理解するのが容易になり、違和感が少なくなつた」<sup>14</sup>ここに我々は、言語の客観的使用法と現象学的あるいは仮説的使用法の対比を、決定論的・刺激反応心理学と主体的人道主義心理学の対比として理解することができる。両者のコントラストは、又、ケリーの主張する、概念（concept）と構成概念（construct）とのコントラストに対応するものとして理解することができる。ケリーは明言していないが、言語の客観的使用法では、 $\wedge A$ は $B$ だ。 $\vee$ という文における述語（ $B$ ）が、主語（ $A$ ）の概念だとするものあり、現象学のおよび仮説的使用法では、述語が、主語とは無関係に、表現者の構成概念を反映すると考えるのだと換言することができる。なお、ケリーの理論は、「個人的構成概念理論」（personal construct theory）であり、構成概念の考え方は、重要な鍵概念であるので、概念と構成概念とを対照的にみてもよい。

「ある論理学者にとって、概念は、概念が関係する事象の性質の特

徴であつて、ある個人の解釈的行動ではない。我々は、概念が實在的であることを認めるけれども、概念の實在性は、概念使用者による概念の實際的使用にあるのであつて、概念が説明すると仮定されている事象にあるのではない。<sup>63</sup>「相互に区別される二つ以上の対象に帰属しうる性質としての概念の古典的觀念は、重要な心理学的事實を無視する。その事實とは、概念が学問的には右記のように定義されるけれども、もし概念使用者が、概念の性質を否定する少なくとも一つの他の対象を念頭に置いていないならば、人間の目的には役立つ。使用者がこのような否定物を持たないならば、一つの共通の性質に対する参照軸（引用者注、枠組）は、弁別的ではなくなり、心理学的に役に立たないものである。」<sup>64</sup>

概念は、心理学的には、事物からの抽出物ではなく、概念使用者の心理的行動であること、そして心理的行動は、たとえば「白対黒」のような二分法的性格の枠組の上に営まれることを、右の引用文は述べている。そしてケリイは、この二分法的性格の枠組を、構成概念と呼んだのである。

「構成概念は、入手可能な現実から、心によって抽出されたエッセンスであると主張することはできない。構成概念は、事象に当てはめられるのであつて、事象から抽出されるのではない。構成概念が生じる唯一の場所がある。それは、構成概念の使用者から生じるということである。使用者が構成概念を考案するのである。加えて、構成概念は、たとえばシンボルが何かを表すと仮定されているようには、何かを表すものではない。」<sup>65</sup>

概念と構成概念とを、単純化して対比するならば、論理的には概念は事物からの抽象物であるのに対して、心理学的には構成概念

は言語使用者の創造的枠組である。したがつて、言語の客観的使用法では、 $\wedge A$ は $B$ だ。 $\vee$ という文における述語が、主語に関する概念だとするのに対して、現象学的使用法では、述語が、言語使用者の構成概念を表していると言ひなすことができる。ケリイは後者の立場から、個人的構成概念理論を構築したわけであるが、しかし彼は、その理論が現象学と共通するところがあつても、本質的なところでは異なるものであると言ふ。この現象学と個人的構成概念理論との差異が、言語の現象学的使用法と仮説的使用法との差異に対応すると判断される。

## 五

次に、言語の仮説的使用法について考察する。この使用法と現象学的使用法とを区別する背景について、最初検討を加えておきたい。

言語の客観的使用法において、主語から述語が導かれるということとは、述語が、主語に関する概念であるということを見てきた。このことは、主語が独立変数で、述語が従属変数だということになる。ところで、ケリイは、十九世紀以来の科学的決定論を、心理学に導入したものが、刺激反応心理学だと見なす。ここで科学的決定論とは、「ある事象が、必ず、他の事象を導くという信念」<sup>66</sup>であり、刺激反応心理学とは、「人間の反応が、外的先行条件（刺激）によって説明される心理学である。そして、刺激が、この種の体系では、刺激によって生み出されるもの（反応）によって、逆に説明される」<sup>67</sup>心理学である。したがつて、言語の客観的使用法が、決定論的刺激反応心理学に対応し、主語が刺激で独立変数に、述語が反

応（行動・あるいは人生の意味）で従属変数になる。ところが現象学は、反応の責任の所在が、人自身にあることをみてきた。ケリイは、この点では現象学に賛成できるとして、次のように述べている。

「人間の行動が、先行事象の中に、きちんと閉じ込められているのを見いだすことができないという主張（引用者注、現象学の主張）に賛成することができる。事象は予言しないのである。加えて、我々は、事象についてほとんど知らないのである。自然における出来事に人が帰属させる性質は無限のようであり、出来事に対する我々の認識は、時間が我々に異なった観点を与えてくれるにつれてどんどん変化する。ある事象を他の事象から異なったものにさせるのは、観察者の個人的経験であるという主張に賛成するのは困難ではない。」

では、ケリイは、現象学のどこに賛成できないのであろうか。「私は、個人的構成概念理論を、現象学的体系と見なさない。現象学は、私的で、相互依存的でない世界の心理学であり、存在論である」とする。その根拠は、「リアリティについての我々自身の枠組という疑わしい手段によつてのみリアリティを知るのであるから、我々の想像という虚構を除いて、リアリティが存在することを仮定しても意味がないと主張する人々（引用者注、現象学者あるいは現象学的普通人）がいる。彼らは、我々自身が考案した枠組（時には経験と呼ばれる）は、我々がずっと持ち続けるものであり、それで満足するように決心した方がよいと主張する」と述べるケリイの見解によく現れている。すなわち、現象学的な人が、外的実在とは完全に無関係に、全く私的で主観的な世界にとどまることに満足していることに對する反発である。現象学的な人すなわち「盲目の詩人

は、壁に触れることもできない部屋に只一人閉じこめられて、彼の耳の中で鳴る音だけしか聞くことができない。彼は、完全なる心の空虚さだけが人間の魂に保証することができる絶対的自由を経験」するのである。

ケリイは、現象学のように、真に存在するのは、我々が考案する枠組しかないのであるから、リアリティの存在を仮定することが無意味だとすべきでなく、その仮定を通して、何かを創造することが重要なことを強調する。「リアリティへの私の唯一の接近が、リアリティに對する責任ある枠組を提供することによってである」ということは、リアリティが存在することを仮定することを妨げない。人間にとつての開かれた探求は、リアリティが存在するか否かということではなく、リアリティから何を作ることができるかということである。もし人が、リアリティから何かを作るならば、人は、それが存在するか否かについて悩むことを中止することができる。もし人がリアリティから何かを作りえないならば、自分が存在するのかもしれないのかについて悩む方がよいのである。」

右記の如く、個人的構成概念理論と現象学とは、ある面で共通点（認識は事象が導くのではなく、認識者の抱く枠組が導くとする点）を持ちながら、重要な面で両者は異なる。その差異は、事象を受けとめる枠組が、現象学では静止的に理解されているのに対して、ケリイでは前進的に変化させうるものとして理解されている点にあると言えよう。しかも、彼は、心理学理論が、人間のあり方、決断を説明すると同時に、理論を創造した科学者（ケリイ）のあり方、決断をも説明する反射性の理論だという。ケリイの体験に基づいて構築された高次の抽象的理論は、人生の心理学的再構成、すな

わち、新しい枠組の創造を目的とし、静止的現象学とは一線を画さなければならなかったわけである。「行動主義も現象学も、人間における上方向的移動（発達）のための心理学的基礎を提供しなかった」のである。そして、上方向的移動を可能にさせる手段が、言語の仮説的使用法だったのである。

## 六

AAはBだ。Vという文において、言語の客観的使用法では、主語が独立変数で、述語が従属変数であった。これに対して、仮説的使用法では、述語が独立変数であるといえる。次にこの点について考察する。

「客観的でも、現象学的でもない、第三の言語使用の可能性を考えてみよう。動詞が招待法(invitational mood)で表現されうるとしよう。すなわち、動詞が、客観的言語における普通の直接法で、あるいは条件法、仮定法、命令法など、我々の文法によって認められている他の法の一つで、使用されるかわりに、対象に対する新しい解釈がなされることを、聞き手に示唆する形で与えられうるだろう。たとえば、私は、A床が硬いかのように床をみなすとしたらどうか。Vと述べるであろう。」

右の招待法文では、硬いという枠組で床を把握している。なぜそうする必要があるのであろうか。それは、直接法に独断論の弊害があるだけではなく、より積極的には、床という主語に日々新たに新しい光を投げかけなければならぬからである。このことについてケリイは次に述べている。

「我々がこれまでに考察した最も価値ある枠組すなわち神について

の我々の特殊な観念でさえ、もっとよい観念を考察した人が溢れるまでは少なくとも、我々が個人的責任を取り続けなければならぬものである。そして私はそういう人が現れると思う。これが非唯一絶対解釈主義の意味するものである。この見解は、認識論的責任の哲学的立場と呼ばれる」ここで述べられていることは、最高の神の観念でさえ、それよりもっとよい真理があって、その下位にくることになるかも知れないので、不可能に近いことではあるが、たとえ神に到達したとしても、その認識はまだ不完全であり、いわんや凡人である我々が、究極的には、真理を把握しうることを期待しつつも、自分の立場から完全だと思つたいかなる認識も、真理にはほど遠いことを自覚すべきだということである。したがって、認識論的責任を自覚する時には、「我々が考察するいかなる命題も、せいぜい、次の探求への一つの招待としてみ役立ちうる、疑問に対する未熟な解答と見なされなければならない」ことになる。このように考える時、動詞は、直接法や、その他の法によるのではなく、招待法で与えられなければならないのである。そして、この招待法文が、言語の仮説的使用法だったのである。

仮説の言語は、刺激反応心理学のように、外部から我々に押しつけられるものでもなく、現象学のように、外的リアリティから隔離されるものでもない。仮説の言語は、リアリティに関する責任ある仮説的枠組を創造し、たしかめ、後になって結果に照らして、修正し、放棄するものである。

## 七

・仮説の言語は、言語使用者あるいは聞き手にどういふ働きをする

であるうか。硬いという仮説的枠組でもって床を検討した結果、その仮説が支持されたばあい、では、A床は硬い。Vと、直接法で表現するのであるうか。答は否である。どこまでも仮説の言語を使用するのである。

「床を硬いと見なすことが意味あることだとわかった時、我々は、床を硬いとしたまま、床から立ち去ることをししない。我々は、Aしかし床は同時に他の何かでもありうる。Vという注を床に常に付加するのである。」<sup>(4)</sup>「A確かに、床は硬いと見なされるかも知れない。そして、このような仮説の光に照らして床に対処する時、何が起ってくるかも知っている。悪くないことだ。しかし、床を柔らかいと見なせば何が起るか次に検討しよう。Vと述べる。」<sup>(5)</sup>床に対して、硬いという枠組を当てはめてみて、それが有効だとわかれば、次に柔らかいという枠組を当てはめてみるというのである。

このような探求から何が生じてくるのであるうか。それは「デカルトが推論したように、床が実際に硬いこと、あるいは床が実際に柔らかいことの確認ではなく、新しい仮説の形成に導く一連の新鮮な経験である。」<sup>(6)</sup>ここでケリイは、仮説として、相対性、性質、弾性、可塑性をあげて説明する。すなわち、「たとえ、床はある物よりは硬く、ある物よりは柔らかいという相対性の観念を人は持つようになるかもしれない。あるいは、ある人は、床の硬い側面と柔らかい側面という性質の観念を持つようになるかもしれない。あるいは、ある人は、硬さを、床に内在するものとしてではなく、床を理解するのに有効な評価の一つの次元とみなすようになるかもしれない。硬さを一つの次元とみなすようになった人は、床を柔らかいという観点から見よとする時、何が生じるかということの説明するため

に、弾性や可塑性の観念を考察するかもしれない。」<sup>(7)</sup>このような仮説の言語と新しい仮説の形成は、いわゆる客観的言語体系が我々を束縛する、ある種のリアリズムから、我々を解放し、新しい観点から、事象に新鮮な意味を付与することを可能にさせるのである。

## 八

事象に対するケリイの柔軟な姿勢は、ドイツの哲学者ハンス・バインガーの思想を代弁したものであり（後述）、このような思想は、リアリズムと鋭いコントラストをなすとして、ケリイは次のように述べている。

「デューイ・Jの哲学と心理学は、個人的構成概念の心理学の多くの行間に読み取られるが、彼は、世界を、理解されるために予期されなければならない進行する事象として心に描いた。この種の思想は、ある種のリアリズムと鋭い対照をなす。そのリアリズムは、ある事物がスピードであれば、それはスピード以外の何物でもないことを、ある人が精神分裂病であれば、その人は精神分裂病以外の何物でもないことを、心臓が生理学的器官であれば、心臓は生理学的器官以外の何物でもないことを、そして心理学的器官としては解釈されえないことを、ある事件が破局であれば、その事件は破局以外の何物でもないことを、ある人が敵であれば、その人は敵以外の何物でもないことを主張するものである。」<sup>(8)</sup>

なおケリイは、リアリズムを生み出す構成概念として、占有的構成概念と星座的構成概念をあげ、仮説的言語に該当すると解釈される提案的構成概念に対立させているので、次に、この点を簡単に整

理しておく。

占有的構成概念は次のように定義される。「ある構成概念の要素（引用者注、構成概念によって意味が付与される対象―物・者・事象）を、その構成概念自身の領域に排他的に閉じ込めてしまう構成概念は占有的構成概念と呼ばれる。種類の型の構成概念はこの範疇に属する。これは、∧ポールは何でも、ポール以外の何物でもありえない。∨という表現に例示されうる。このばあい、構成概念はポール（引用者注、このポールは要素ではなく、枠組を意味する。）であり、ポールと呼ばれるあらゆる事物（引用者注、要素）は、他の構成概念の領域から排除される。この事物は、球・丸槳・弾丸、あるいはポール以外の何かではありえない」。

星座的構成概念は次のように定義される。「ある構成概念の要素を他の領域（引用者注、他の構成概念）に同時に所属させる構成概念は星座的構成概念と呼ばれる。ステレオタイプがこの範疇に属する。

たとえば、星座的構成概念は、∧ポールはどんな物でも、同時に、はずむ物でなければならぬ。∨という文で表現される。（中略）

この型の構成概念では、ポールは、ポール以外のある物として同時に考えられるが、ある物以外の何かとしては考えられない。ポールは、ポールである限り、又ある特殊な他のものでなければならぬ」。

これらとコントラストをなす提案的構成概念は、次のように定義される。「ある構成概念の要素が他の領域の構成員（引用者注、他の構成概念の要素）になることを妨げないものが提案的構成概念である。たとえば∧哲学的態度∨がそれである。∧丸みのあるどんな固まりも、他の物でもあるし、ポールとも考えられうる。∨∧これはポールであるけれども、だからといってこれが左右不均衡であった

り、価値があったり、フランス語のアクセントを持ってはならない理由はない。∨」

提案的構成概念の使用が望ましいとしても、ある人が排他的にこの構成概念を使用しているばあいは、決定を下す時に困難に落ちいらざるをえないであろう。たとえば、野球の試合で、彼の方に飛んで来る球状のものを、考えられるあらゆる角度（観点）から、熟慮するために、瞬間的にポール（球）以外の何物でもないものとして処理できなくなるであろう。決定を下す時には占有的思考も重要となる。しかし、「占有的思考は、提案的思考に分解しないならば、人に知的死後強直状態の宣告をする（引用者注、人から創造性を取りあげ、独断論の世界に安住させる。）。彼は∧行為の人∨と呼ばれるが、彼の行為は常に使い古した慣例の後に続いていくであろう」。

## 九

我々は、構成概念の次元として述べられたケリーの占有的及び星座的構成概念を使用することによって、リアリズムの道に進み、現実あるいはリアリティに対して盲目になってはならない。リアリズムへの道を促進するのが、言語の客観的使用法である。それに反して、現実あるいはリアリティに対して、謙虚に心を開き、提案的構成概念を使用することによって、非唯一絶対解釈主義の道を歩まなければならぬ。この方向への歩を進めさせるのが、言語の仮説的使用法だったのである。

言語の仮説的使用の思想的背景はハイヒンガーに求めることができるとしてケリーは次のように述べている。「十九世紀の終わりに

ドイツの哲学者ハンス・バイヒンガーは、仮説の哲学と呼んだ一つの哲学体系を發展させ始めた。その中で彼は、神とリアリティが、**範例引用者注、仮説**として最もよく描写されるという思想体系を提案した。これは、神やリアリティが、人間の認識界における他の何かより不確かなものであるということではなく、人間が直面するあらゆる事柄に、人は仮説的方法で最もよく関係しようということである。<sup>98</sup>

なお、ケリーの全著書と論文中、バイヒンガーについて記録されているのは、アルフレッド・アドラーが、バイヒンガーを研究し、仮説の哲学の心理学的意味を把握していたという指摘を除いては、右記の引用文しかない。ケリーの思想・理論の形成に、バイヒンガーの影響があったかどうか現在筆者には判断できない。しかし、ケリーは、「私が経験した一連の出来事を考えてみると、私は、長い年月の間に出合った多くの関連のある事を思い出すことができる。

しかしその瞬間、私は、これらの出来事が私の理論を構築することに収斂したと主張することができない。出来事は、理論に挑戦し続け、必ずしも理論の發展にとって建設的ではなかった。後になって考えてみて、私の現在の理論が予期するものを、ある種の出来事が正しいことを証するという理由だけで、これらの出来事を、私は現在思い出すことができるのかも知れない」と述べており、ケリーの考えとバイヒンガーの思想とが偶然一致したのではないかと判断される。

ともかく、人間は仮説を創造することによって、新しい世界に前進することが可能になるのである。科学の進歩も、人間の精神的発達も、仮説を發明することによって、新しい世界を発見することが

可能になるのである。

## 十

最後に、人間形成における仮説言語の特殊な役割について考察しよう。

ありのままの自分自身であることは健康なことだという教義がある。ここで主張されていることは、人は、ありのままの自分以外の何かになろうと努力すべきではないということである。又、心理学者も、人は自分自身を変装すべく努力すべきではないと主張する。

ここでは、赤裸々に世界に直面する人は、より自発的であり、自己を十分に表現し、あらゆる個人的資源を發達させるよりよい機会を持つ、ということが仮定されている。果してそうであろうか。この問題に関連するケリーの主張は次の通りである。

「重要なことは、人が何であるかということではなくて、自分を何に割り上げようとして努力しているかということである。飛躍をするためには、自分自身をあらゆる以上のことをしなければならぬ。人は、ある程度の混乱(引用者注、何が何だかわからなくなった精神の混乱状態)の危険を犯さなければならない。それから、別の生き方をかいま見るとき、人は脅威(引用者注、別の生き方に進めば、これまでの自分とは離別しなければならぬことに気づくこと。自己のさし止まった包括的变化の認識)という無力な瞬間を克服する方法を発見しなければならない。なぜなら、この瞬間は、人が過去の自己であれ、これから成ろうとしている自己であれ、自分が本当に何であるかを考える時だからである。<sup>99</sup>」このように、ケリーは、過去・現在の自己に安住することなく、未来に向かって飛躍すること

こそが、人間にとって重要だという。しかも彼によれば、人が飛躍するために、「混乱の危険」を犯し、「脅威を克服」しなければならない。

実存的飛躍は精神の混乱状態すなわち不安に出发点がある。ここで不安とは次のように定義されるものである。「不安は、直面する事象が、構成概念体系の適用範囲の外にあるという認識である。勿論、事象が、構成概念体系の適用範囲の全く外にあるならば、その事象を知覚することさえできないし、その事象について特に不安を感じることはありえない。事象について構造的把握を部分的に失った時に不安が生じる。不安という混乱に落ちるのである」<sup>44)</sup>

しかし、創造性の基盤である混乱は、必ずしも、新しいものを生み出すことだけに役立つではなく、不安は、人を二つの道のいずれかに駆り立てる。すなわち「混乱は、人がその混乱を、耐えられないものと感ずるばあいには特に、世界に対する古い解釈に逆戻りする」という新しい方向とは逆の効果も持ちうる。それ故にこゝにあるものを創造するために、混乱をあえて進む人にとっての危険の要素がある。人は狼狽を押さえるために、退行してしまうかも知れないのである」<sup>45)</sup>

しかし創造の過程には、不安と明確さとの間の段階すなわち脅威の位相がある。なお脅威は次のように定義されるものである。「脅威は、人の中心的構造の切迫した包括的变化に対する意識である。脅威が有意味になるためには、変化の可能性が確実性の高いものでなければならぬ。(中略)又変化の可能性が、包括的(引用者注、部分ではなく、中心的構造の全体的)変化として認知されなければならぬ」<sup>46)</sup>そして、脅威は恐怖と次のように区別される。「恐怖は

起ろうとしていることが、包括的構成概念であるよりもむしろ新しい付随的構成概念であることを除けば脅威と同じである」<sup>47)</sup>この脅威と混乱(不安)との創造の過程における関係は次の通りである。創造の過程における脅威は、「新しいものを求めるか、それとも古いものに退行することによって追い払おうとする混乱と、何が何であるかを明らかにする、世界についての構造化された見解との中間にある。混乱が部分的に明らかになり、何が現れるのかを一瞥すると同時に、その道を進めば、しかし自己が大きな変化をしなければならぬことに気づく」<sup>48)</sup>あの過渡的瞬間が脅威である。すなわち、混乱と確かさ、不安と退屈(物事が明らかにになり、変化・創造・飛躍への力の弱化)との間の敷居が脅威である。まさにこの瞬間に人は、前進を躊躇し、混乱以前の古い状態にバックしそうになるのである。しかし人は、乱混の危険を犯し、脅威を克服してこそ、飛躍が可能になるのである。

この飛躍を可能にさせる混乱の危険と脅威の克服に対して、言語の仮説的使用法が力を発揮するのである。いわゆる客観的言語体系が我々を束縛するあのリアリズム(直接法動詞及びリアリティについての相互に排他的な見解の間の必然的選択の信念)から、仮説の言語が我々を解放するのである。そして、実存的飛躍をするためには、新しい仮説を持つために不安というカオスの危険を犯すと同時に、「人生における重要な問題についての新しい見解(引用者注、仮説)を持ちえたばあい、これまでの自己からの恐ろしい離別の瞬間に直面しなければならない」<sup>49)</sup>ここにおいて、「古い真理が新しい真理に変わったとか、ある直接法から他の直接法に変化した」とあることを主張する代りに、変化しつつあるのは真理ではなく、真理への新

しい接近の可能性を試的に探求しつつあるという考え」を取ることを可能にさせる招待法と呼んだ仮説の言語が役割を發揮するのである。「仮説は、真実ではない結論を真実だとして、その結論の意味を追求するのに必要な十分な時間の間、真実ではない結論を防御維持させるのに役立つ。結論が一つの仮説しかも一つの仮説にすぎないとはみなされることは、心理学的に非常に重要である。なぜなら仮説は、脅威の瞬間を突破することを可能にさせるからである。仮説は、結局、仮説に過ぎないのである。」<sup>43</sup>

## 十一

以上、仮説の言語とケリーの思想・理論との関係、その背景及び人間形成における仮説の言語の役割（不安を誘発し、脅威を克服させる機能）について考察してきた。この仮説の言語は、事象の属性の言語ではなく、事象に意味を付与する次元の言語であった。そして仮説の言語によって、事象の部分ではなく、事象から独立に存在する一つの次元を心に描くことに招待することであった。このような次元すなわち個人的構成概念を考察することによって、この仮説の次元上に、事象の位置を定める（意味を付与する）ことに導くこととであった。

仮説は理論から演繹的に、又観察から帰納的に導かれることがある。しかし「仮説演繹法における直訳主義のゆがみと、仮説帰納法における個人的ゆがみ」を我々は認識しなければならない。むしろ矛盾した非論理的思考こそ人間の進歩がある。「ほとんどの形式

的論理は絶対確実性を確立することと関係する。しかし人間の進歩は、不確実性を選択的に創造することにも依存する。すなわち常識をはずれた懐疑を指示し、新鮮な問題を形成することにも依存するのである。」人間にとって、論理と推断は、存在論的冒険への指針になると同時に、障害物にもなりうるのである。「含まなければならぬすべての部分を考慮する統合された全体（引用者注、すべての部分間に論理的・一貫性のある完全体）で人間があるならば、貧しき人間は人生まれた状態の自我√以上のものには成りえないだろうけれども、人を偉大にするのは、往々にして、個人の構成概念体系の非論理的断片なのである。」——分裂系「人は引き続き、論理的に相互に矛盾する、種々の下位構成概念体系を用いる。」（個人的構成概念理論における一つの系）——

我々は、自然主義的人間観がするように、リアリズムに落ち入ってはならないし、論理実証主義者がするように、自然主義的実証主義に基盤を置くこともできないであろう。又現象学がするように、閉鎖的に、主観の世界で満足することもできないであろう。我々は、リアリティに志向し、永遠に、実存的飛躍を繰り返さなければならぬであろう。

ケリーの内側にある、ある熱いものは、必ずしも、ことばとして明確に表現されてはいない。ケリー理解は、彼の内側にあることばを追体験し、我々も実際に歩み出すことにより、より深まると思われる。

（埼玉大学教育学部助教授）

- (1) Kelly, G. A. The language of hypotheses: Man's psychological instrument, in B. Maher(ed.), *Clinical Psychology and Personality*, The Selected Papers of George Kelly, Wiley, New York, 1969.
- (2) Kelly, G. A. The Psychology of Personal Constructs, Vol. 1-2, Norton, New York, 1955.
- (3) Kelly, G. A. The autobiography of a theory, in B. Maher(ed.), *Clinical Psychology and Personality*, 1969.
- (4) 藤原 哲 ショージ・ナリイ研究(2)一哲學的立場(その個人の構成概念理論の成立過程)一埼玉大学給養教育学部(教育科学)一九七五年三月一五六。
- (5) 精神医学と心理学に関する Norton Paperback のケリーの著書について ノロトヤカブシキハヤクニオケルヤレバシム。
- (6) Kelly, G. A. Man's construction of his alternatives, in B. Maher(ed.), *Clinical Psychology and Personality*, 1969, p. 73.
- (7) Kelly, G. A. The language of hypotheses: Man's psychological instrument, 1969, p. 147
- (8) 複製部 p. 148.
- (9) Kelly, G. A. Man's construction of his alternatives, 1969, p. 72.
- (10) 複製部 p. 71.
- (11) 複製部 p. 72.
- (12) Kelly, G. A. A brief introduction to personal construct theory, in D. Bannister(ed.), *Perspectives in Personal Construct Theory*, Academic Press, London and New York, 1970, p. 4.
- (13) 複製部 p. 2.
- (14) 複製部 p. 2.
- (15) Kelly, G. A. The language of hypotheses: Man's psychological instrument, 1969, Pp. 148-149.
- (16) Kelly, G. A. The Psychology of Personal Constructs, Vol. 1, 1955, p. 106.
- (17) Kelly, G. A. Ontological acceleration, in B. Maher (ed.), *Clinical Psychology and Personality*, 1969, p. 9.
- (18) Kelly, G. A. A brief introduction to personal construct theory, 1970, p. 13.
- (19) Kelly, G. A. In whom confide: On whom depend for what, in B. Maher (ed.), *Clinical Psychology and Personality*, 1969, p. 201.
- (20) Kelly, G. A. The threat of aggression, in B. Maher (ed.), *Clinical Psychology and Personality*, 1969, p. 286.
- (21) Kelly, G. A. Ontological Acceleration, 1969, p. 26.
- (22) Kelly, G. A. Sin and psychotherapy, in B. Maher (ed.), *Clinical Psychology and Personality*, 1969, p. 177.

- ㉔ Kelly, G. A. Ontological acceleration, 1969, Pp. 23-24.  
 ㉕ 福澤諭' p. 24.  
 ㉖ 福澤諭' p. 25.  
 ㉗ Kelly, G. A. The Psychology of Personal Constructs, Vol. 1, 1955, p. 39.  
 ㉘ Kelly, G. A. A brief introduction to personal construct theory, 1970, p. 22.  
 ㉙ Kelly, G. A. The language of hypotheses: Man's psychological instrument, 1969, p. 149.  
 ㉚ Kelly, G. A. A brief introduction to personal construct theory, 1970, p. 4.  
 ㉛ 福澤諭' p. 5.  
 ㉜ Kelly, G. A. The language of hypotheses: Man's psychological instrument, 1969, p. 159.  
 ㉝ 福澤諭' p. 160.  
 ㉞ 福澤諭' p. 160.  
 ㉟ 福澤諭' p. 160.  
 ㊱ Kelly, G. A. The Psychology of Personal Constructs, Vol. 1, 1955, p. 154.  
 ㊲ 福澤諭' Pp. 153-154.  
 ㊳ 福澤諭' p. 155.  
 ㊴ 福澤諭' p. 157.  
 ㊵ 福澤諭' p. 156.  
 ㊶ Kelly, G. A. The language of hypotheses: Man's psychological instrument, 1969, p. 149.
- ㊷ Kelly, G. A. A brief introduction to personal construct theory, 1970, p. 6.  
 ㊸ Kelly, G. A. The language of hypotheses: Man's psychological instrument, 1969, p. 158.  
 ㊹ Kelly, G. A. The Psychology of Personal Constructs, Vol. 1, 1955, p. 495.  
 ㊺ Kelly, G. A. The language of hypotheses: Man's psychological instrument, 1969, p. 151.  
 ㊻ Kelly, G. A. The Psychology of Personal Constructs, Vol. 1, 1955, Pp. 489-490.  
 ㊼ 福澤諭' p. 494.  
 ㊽ Kelly, G. A. The language of hypotheses: Man's psychological instrument, 1969, Pp. 151-152.  
 ㊾ 福澤諭' p. 162.  
 ㊿ 福澤諭' p. 152.  
 ㋀ 福澤諭' p. 152.  
 ㋁ Kelly, G. A. The Psychology of Personal Constructs, Vol. 1, 1955, p. 34.  
 ㋂ Kelly, G. A. The strategy of psychological research, in B. Maher (ed.), *Clinical Psychology and Personality*, 1969, Pp. 114-115.  
 ㋃ Kelly, G. A. A brief introduction to personal construct theory, 1970, p. 20.  
 ㋄ Kelly, G. A. The Psychology of Personal Constructs, Vol. 1, 1955, p. 104.